



TITLE:

2.1 京都大学環境ファクトシート エコ〜ると京大2018活動報告

AUTHOR(S):

エコ〜ると京大メンバー

CITATION:

エコ〜ると京大メンバー. 2.1 京都大学環境ファクトシート エコ〜ると京大2018活動報告. 環境保全 2019, 33: 23-27

ISSUE DATE:

2019-03-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/243109>

RIGHT:

2. 環境保全業務報告

2.1 京都大学環境ファクトシート エコ～るど京大2018活動報告

エコ～るど京大メンバー

(安藤悠太、奥野真木保、土村萌、Rojina BADE、Abiyan Ardan ARFANI、Isaac OMONDI、
黄 蔚軒、常光俊行、于再治、高田咲、谷合敬太、西堀功規、柴田星斗、山口真広、
上田知弥、久保文乃、西道奎、澤田大和、筒泉宏樹、江城静順、西本早希、後鳥友里、
白井亜美、田中千尋、松尾浩晃、横井晴紀、浅利美鈴)

2.1.1 はじめに

全員参加型で環境負荷を低減した持続可能なキャンパスの実現を目指して、様々な企画を実施した。今年度も、毎年恒例の初夏の陣をはじめとして、様々な企画を学内で開くと共に、学外の方たちと連携したプロジェクトも行った。なお、「エコ～るど京大」とは、エコ×世界（ワールド）からの造語であり、「Think Globally, Act locally, Feel in the Campus!」のメッセージを込めるのと同時に、本学内でのエコを学ぶ学校（École とはフランス語で学校）を多様な形で開校する意味を込めたものである。

2.1.2 初夏の陣

環境月間である6月とその前月の5月の2ヶ月間、「持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals; SDGs）」の各項目に関連させて様々なイベントを実施した。5月は、SDGsの存在や全体コンセプトを知ってもらうための企画が中心であり、6月は一つ一つの目標に特化したイベントを行った。できるだけ多くの構成員に参加してもらうこと、環境意識を向上させることを目的とした。

(1) オープンラボ

恒例のオープンラボ企画は、2018年5月8日から5月30日にかけて開催した。オープンラボの目的は、本学の先生と学生・市民が環境に関する話題を自由に交流出来る機会を提供することであり、今年で第5回目を迎えた。会場は例年通り京都大学吉田キャンパス西部構内にある京大生協ルネの一階である。

ラボ企画は、座談型企画、展示型企画、参加型企画の3つに分けることが出来る。一つ目の座談型企画では、日替わりで先生がラボに登場して頂き、普段の講義とはひと味違ったお話が聞ける機会を提供した。また先生方オススメの書籍をラボに展示し、ラボに参加した後、学びを深める機会を設けた。二つ目の展示型企画では、エコ～るど京大メンバーがSDGsの17項目に関わるクイズを考え、各生協食堂に展示し、ラボではクイズの解答・解答例を展示した。また、全文英語の問題や答えがひとつではない問題など、難解な問いばかりであったが、SDGsについて知り、考えるきっかけとなった。三つ目の参加型企画は4つであった。一つ目は、レジ袋の削減のための企画であるマイバッグを作成するワークショップで、日本環境保護国際交流会（J.E.E.）と布

遊工房に協力して頂いた。二つ目と三つ目は、ラボ企画で登場して頂いた先生が中心のイベントで、山敷庸亮先生による「惑星観察ナイト」と角山雄一先生ほか3月に福島県研修に参加した学生による「福島県研修報告会」というイベントであった。四つ目は、「持活プレ調査」である。スマホ上で、わずか3分でできるアンケートで、SDGsに関する意識調査を目的としたものであった。

<ラボ担当の先生（順不同・敬称略）>

浅利美鈴先生（地球環境学学）

磯部洋明先生（京都市立芸術大学美術学部）

酒井敏先生（人間・環境学研究科）

角山雄一先生（放射性同位体元素総合センター）

野中铁也先生（工学研究科）

本川雅治先生（総合博物館）

山敷庸亮先生（総合生存学館）

<協力団体>

AIESEC 京都大学委員会

京都ホストファミリー協会 KAHF

(2) チャリティーフリマ

オープンラボの開催期間中、ルネの店舗前でフリーマーケットを開催した。日用品やブランド服、書籍などを1点10円から販売した。食堂の1階の外で開催していたためか、お昼休みの前後に多くの学生が興味をもって眺めていた。さらに大学職員や地域の方々も訪れ、連日賑わっていた。合計売上は32,632円となり、2018年7月上旬に発生した「平成30年7月豪雨」の被災地に寄付した。

(3) 変人酒場

5月16日放課後に「京大变人講座」を企画している酒井敏先生（人間・環境学研究科）と「京大变人酒場」を開催した。学生や学内関係者だけでなく社会人まで25人程度の方に参加していただき、普段の生活では出会うことの出来ない人同士の交流の場となった。参加者それぞれが食べ物を持ち寄り、エ

コ〜るど京大からは、ジビエハンバーグと食べられるお皿を変わり種として用意した。参加者からは自分の身の回りの人とはまた違う人との出会いの場になったとの感想があった。

(4) 健康デー 夜ヨガ太極拳

5月23日に一日、気軽に健康について考えてもらう機会として「健康デー」を設けた。この企画は京都大学健康科学センターとのコラボ企画として、健康科学センターの先生・医療スタッフの方々と協力して開催した。この日は、11時から3回、15分のプチ気功・太極拳を、12時から3回、15分のプチヨガを開催した。気功・太極拳は、ゆったりとした動きの一方、筋肉が動かされて体が少しぽかぽかした。ヨガは、お昼時でざわざわしていたが、いくつかポーズをするうちにだんだんと集中することができたようだった。参加者は25名であった。

(5) 特別講義「海洋資源・環境の保全とブルーシーフード」

6月1日の13時から15時にかけてセイラーズフォーザシー日本支局理事長の井植美奈子さんにご講演頂いた。この講演は地球環境学舎の講義の一環であり、約60名の参加があった。セイラーズフォーザシーは、資源量の比較的多い水産資源を「ブルーシーフード」としてリストアップし、まとめて掲載した「ブルーシーフードガイド」を作成している。本学においても、エコ〜るど京大と協同してブルーシーフードを総長カレーに採用し、京大生協カンフォーラでレギュラーメニューとして提供している。この講義では、井植さんのセイラーズフォーザシーでの活動内容・背景について学ぶことができた。

(6) フェアトレードコーヒーの講演

6月7日に農学部総合館で「フェアトレードコーヒーから貧困・教育を考える」と題した講演が行われ、50名ほどが来場した。講師には辻村英之先生（京

都大学農学研究科教授)、須藤祥吾さん(アイセック京都大学委員会)をお呼びした。内容は、まず須藤さんによるウガンダでのインターン経験の紹介、その次に、辻村先生によるタンザニア・キリマンジャロのルカニ村における、フェアトレードコーヒーの役割に関する講演であった。講演中には、京大生協カンフォーラで実際に販売しているフェアトレードコーヒーを試飲することができた。

(7) 浴衣着付け教室

6月12日、14日、19日の3日間、放課後に浴衣着付け教室を行い、3日間で11人が参加した。これは、京都大学の学生団体である京都着物企画との共同企画である。京都着物企画では、昨年度からエコ〜ど京大とコラボして、使わなくなった着物を持ち主から欲しい人の手へと渡し、そのような人と人との繋がりを通して魅力ある着物を再び活用させていく取り組みである“Kistory”を展開しており、今回の着付け教室は、この Kistory のイベントも兼ねて行われた。多くの人に浴衣の良さを再認識してもらうきっかけになった。

(8) セプテンバー11

6月21日に2001年9月11日のアメリカ同時多発テロ事件をテーマに、世界各国を代表する11人の映画監督が「11分9秒01フレーム」という共通の条件下で制作した短編を集めたオムニバス映画『セプテンバー11』の中から、3つの作品を約20人のイベント参加者で鑑賞した。一つ一つの細かい描写について、その背景となる歴史的事実や思想についてイベント参加者で意見を出し合ったのち、人間環境学研究科の岡真理先生に解説をいただき、映画を深く理解することができた。SDGsの16番目の目標である「平和と公正をすべての人に」という日常生活ではあまり感じるできない目標を、映画を通じて考えるきっかけとなるようなイベントとなった。

(9) 模擬国連 日本のご飯を味わう会

6月28日に模擬国連と日本のご飯を味わう会が開催された。模擬国連は、実際の国連での会議に模して、参加者は各国大使になりきり自国の国益を守りつつ、合意を形成する駆け引きを行うゲームである。議長を含め13名が参加した。テーマは持続可能な社会を作るために先進国が発展途上国に支援する枠組み作りであった。現実世界で起こっている先進国・発展途上国間の対立がこの模擬国連でも起こり、普段は日本の立場からのみ国際問題を考えがちであるが、それを他国の視点から見るときっかけにもなった。

また、模擬国連の合間で、日本のご飯を味わう会を開いた。これは日本の食糧自給率が低いという課題に対して、米を食べることで少しでも貢献することを目的としている。西洋化した食生活に上手く日本従来の食生活を練りこむことが、日本の持続可能な社会形成につながるのではないだろうか。

(10) 持続可能性への挑戦講演・交流会

6月29日に持続可能性への挑戦講演・交流会を開催した。第一部・二部で約60名の方に参加していただいた。第一部では、元京都大学大学院地球環境学堂・学舎長であり現在は滋賀県琵琶湖環境科学研究センター長の内藤正明先生と、前滋賀県知事であり現在は未来政治塾塾長の嘉田由紀子先生をお招きし、学生や会場との交流を中心とした企画を実施した。テーマとして、本の中での注目点だった「科学の真理探究と、政策の利害追及の連携」を挙げ、それを基に学生と意見交換をしながらテーマの理解を深めた。本の構成と同様に、それぞれ違うトピックを扱った三部構成として、それぞれの部に対して1名、計3名の学生が発表と意見交換・先生への質問をした。お二人が著者となられている「滋賀県発！持続可能性社会への挑戦 科学と政策をつなぐ」を参加者全員が事前に読むことでより深く、本の内容から踏み込んだ内容に触れられることができた。

第二部は、学生と企業、団体の人が8つのグルー

プに分かれてワークショップを行った。「生産年齢人口の減少、耕作放棄地、大手工場の撤退などの合計 10 個の問題を抱えた日本のある地方自治体がある。その地域内でそれらの問題を解決できるような会社を設立する。」というテーマであった。途中で、5 分だけ嘉田先生、内藤先生、藤井先生（京都大学大学院地球環境学堂教授）のいずれかからアドバイスをもらうことができ、各チームその時間をうまく利用して企業を考え出した。その後、各チームのアイデアを CM 風に 2 分間発表し、自分が投資したいと思う企業に投票を行った。自由な発想で地域に適応し、持続可能である企業のアイデアが出されて大変盛り上がった。

2.1.3 東北研修

6 月 16 日から 6 月 18 日の三日間、東北研修として宮城県石巻市、南三陸町などを訪れた。この東北研修のきっかけはエコ〜るど京大の企画の一つである「ブルーシーフードの缶詰カレー作り」にあたって、缶詰を作って頂く工場を訪ねたいという思いであった。同時に、石巻の復興の象徴でもある工場の訪問に加えて、震災から 7 年以上が経過した現在の石巻の復興の状況や石巻に住む人々の思いなどをできるだけ近い立場で知り学ぶことも大きな目的の一つとなった。研修では、東北大学復興プロジェクト“HARU”さんと共に、復興公営住宅で被災者の方々のお話を聞かせて頂いて交流したり、実際に避難した高台に登ったりした。交流では、目に涙を浮かべながらも震災での体験を話して下さる方もいて貴重な経験となった。さらに、被災地石巻を深く知る視察、缶詰を作って頂く予定の木の屋石巻水産の工場の見学、アマタホールディングス株式会社の南三陸 B I O というバイオガスと液肥を作っている施設の見学等を行った。

2.1.4 鯖江田舎体験プロジェクト（夏・冬）

東京や京都などの観光地だけしか旅行に行かない

留学生に、日本の田舎を体感してもらうことが目的である「田舎万歳！鯖江プロジェクト」を企画するために、福井県鯖江市河和田地区で 9 月と 1 月に現地調査を実施した。9 月には、河和田地区の人におすすめの場所などを聞く「河和田いいところ調査」を行い、河和田アートフェスというお祭りにも参加した。参加メンバーの中には、鯖江が初めての人も多く、色々な場所を見て回り河和田の魅力を実感した。夜には、地元の方たちからやんしき踊りという伝統的な踊りを習い、たき火を囲んで親睦を深めた。1 月には、河和田地区で行われる餅まきというユニークなお祭りに参加した。また、留学生に発信するウェブページなどを作成するにあたり必要な情報を得るモニターツアーを実施することができた。

2.1.5 食のシンポジウム（ワークショップ、メニュー開発）

10 月 29 日、30 日の 2 日間時計台ホールにて開催された「食と持続可能性」シンポジウムにおいて、「フードポリシーことはじめワークショップ」と持続可能なスープの開発・提供を行った。ワークショップでは、誰が、何を、いつ、どうやって食べるかを形作る食に関わるすべての事象に横串を刺し、一貫して包括的に取り組むことを目指す方策であるフードポリシーを知ってもらい、理解を深めてもらうことを目的とした。このワークショップでは、京都市または京都大学のフードポリシーを考えてもらうため、第一部で、京都市、京都大学の抱える問題点を見つけてもらい、第二部でその問題を解決する提言を考えてもらった。学生、企業や行政の方々が総勢 70 名参加し、食堂で規格外の野菜を利用する、正しい食の知識や選択する権利を学ぶ教育プログラムを作成する、などの提言が出された。

また、ネットワーキングディナーでは、本学で食による社会貢献を考える他の学生と協働し、健康、食品ロス、持続可能性に配慮した食事メニューの提供を行った。提供したのは、野菜の皮でだしを取ったスープと、ブルーシーフードである鯖を使用し、

ハラールにも対応している鯖カレーである。これらのメニューは生協へのメニュー化を視野に入れておりハラール、ブルーシーフード、食品ロス削減、ベジタリアンの 4 つのコンセプトに沿って作られたヘルシースープを、今後も京大内で提供することによって、シンポジウム後も「食と持続可能性」の問題に触れるきっかけをつくっていく。

2.1.6 COP24 関連企画

第 24 回気候変動枠組み条約締約国会議(COP24)が 2018 年 12 月に開催されるに当たり、京都宣言や DO YOU KYOTO? 運動の活動内容をポーランドにて発信するキャンペーンを行った。主に、ポーランドで行ったのは、DO YOU KYOTO?に関するプロモーションビデオの上映・発表、エコちゃんねぶたの制作・展示、カトピツエ市民の方々との交流、京都の小中学生のポスター展示である。一つ目のプロモーションビデオの上映・発表は、京都の小中学生対象の環境教育の様子、京都市長のコメント、京都のエコな暮らし方などをまとめたビデオとプレゼンテーションをカトピツエの方に向けて行った。二つ目のエコちゃんねぶたの制作・展示は、DO YOU KYOTO?運動のイメージキャラクターであるエコちゃん型のねぶたを日本で京都市民や学生の協力のもとで作り、ポーランドで展示を行ったというものだ。三つ目のカトピツエ市民との交流では、京都で行われた DO YOU KYOTO?イベント参加者(特に子供たち)が作成したクリスマスカードを授与する代わりに、カトピツエ市民にも、京都市民に届けるクリスマスカードを作成してもらった。25 名以上の方にクリスマスカードを作成してもらい、京都の小学生やイベント参加者に届けた。小さな子供からお年寄りの方まで様々な方に参加してもらい、とてもよい交流の機会となった。四つ目のポスター展示は、京都市の小中学生の環境教育の中で作った DO YOU KYOTO?、環境問題に関するポスターをポーランドで展示した。多くのカトピツエ市民に見てもらうことが出来、何人かからはポスターの感想ももらった。

また、梅小路小学校や大原学院では、11 月に DO YOU KYOTO?大使のカタジーナ・ミフェニフスカさんらが来日した際に、ショパンのピアノコンサートを行った。ピアノの演奏を聴くだけでなく、ポーランドの環境問題についてのお話もあり、子供たちがポーランドについて知る機会になった。

2.1.7 Kistory

Kistory は、箆笥の中に何億枚も眠っていると言われる着物を、思いを大切に次世代へ受け継ぎ、文化を継承させることを目的とした着物復活企画である。エコ〜るど京大と京都着物企画が協働し、着物の募集から始まり、着付け練習などを経て、12 月 22 日京都大学時計台記念館にて、着物の受け渡しを行う贈呈式を開催した。着物を受け取った約 60 名と、その他、ボランティアの方々や寄贈者様も来てくださり、大変賑やかなイベントとなった。式には市長にご臨席賜り、日々着物を着ていらっしゃる立場から参加者への策励のお言葉と、本イベントへの温かいコメントを頂いた。着物を受け取る若者同士はもちろん、寄贈者の方々と交流する場を設けることができ、また、みんなで着物を着て楽しむ良い機会ともなった。また、このイベント内では風呂敷の多様なデザインを紹介するとともに、実際に体験してもらいながら弁当箱やワインボトルなどの包み方を紹介した。さらに風呂敷に関連させ、レジ袋やプラスチックごみ問題などの環境問題に関して参加者の理解が深まるようにポスターなどを利用して解説した。